

ゆめ風基金・DPI 日本会議
フィリピン台風被災障害者支援
調査報告書

2014年2月14日

DPI 日本会議

調査対象地 地図



Google map より筆者作成

1. 調査の背景

2013年11月8日にフィリピンを直撃した大型台風30号（現地名ヨランダ）は、中部レイテ島を中心に高潮や土砂崩れなどにより死者・不明者数は7986人に上り（まにら新聞2014年2月1日）、食料・水の不足、衛生環境の悪化により被害は甚大な規模となっている。DPI日本会議は、11月22日より被災障害者に対する支援金の受け付けを開始すると同時に、マニラの自立生活センター「ライフヘブン協会」と連携し、被災地の障害者に関する情報の収集してきた。

東北大震災支援においても連携してきた特定非営利活動法人ゆめ風基金の馬垣理事は、今回の台風以前よりフィリピンの被災障害者支援を行ってきたことから、翌12月に現地にて情報収集を行い、ライフヘブン協会と支援方法について討議した。帰国した馬垣氏とDPI日本会議は、検討の結果今回の被災障害者支援をゆめ風基金と協働して行うことを決定した。

活動拠点となる当事者団体との連携が可能と思われることから、支援対象となる地域は、レイテ島の中心都市であり被害が甚大であるタクロバン市とする。また支援金が持続的に被災地の障害者の生活環境の復興に役立つよう、支援方針を以下の2点に絞った。

- ① 当事者組織の拠点整備（事務所の改修、備品購入等）
- ② （車椅子を含む）福祉機器の提供

2. 調査の目的

支援先となる現地活動拠点と福祉機器の提供対象の特定のため、2014年2月に現地調査を行った。タクロバン市の当事者団体であるTAPDICO(Tacloban Persons with Disabilities Cooperative：タクロバン障害者組合)を現地活動拠点とし、同市内での福祉機器ニーズを含む障害者情報の収集を行った。調査の目的は以下のとおりとなる。

- ① 支援団体の特定・支援内容の検討
- ② 福祉機器供与先のリストアップ

これらの調査を経て、実際の支援実施、物資提供に移るものとする。

3. 調査団員

本調査の団員構成は以下のとおりである。

Abner Manlapaz	ライフヘブン協会代表
馬垣 安芳	特定非営利活動法人ゆめ風基金理事、社会福祉法人ぷくぷく福社会代表
小倉 國夫	社会福祉法人 AJU 自立の家、アジア障害者支援プロジェクト代表
千葉 寿夫	障害と開発コンサルタント (D-knowledge 代表)、首都大学東京大学院人文科学研究科社会福祉学・博士課程 (フィリピン大学留学中)
佐藤 ^{ほうぞう} 宝倉	フランシスコ会神父、PSFADC(フィリピン聖フランシスコ・デフ・センター) 代表
堀場 浩平	特定非営利活動法人 DPI 日本会議事務局員

本調査のキーパーソンとなるアブナー氏（脊髄損傷、車椅子利用）は、マニラにおける自立生活センターの代表であり、DPI 日本会議の加盟団体であるヒューマンケア協会による研修を受けたことから、同団体とは緊密な関係にある。被災障害者支援を担当する NCDA（障害者問題国家委員会）の会議にも参加しており同国各地の当事者団体とも連携を持っていることから、本調査の現地コーディネーターを担当した。アジア障害者支援プロジェクトの小倉氏（脊髄損傷、車椅子利用）はタイ、ラオス、ベトナム、ウズベキスタン等アジア各国で車椅子供与に長年の経験があることから、本調査結果を福祉機器提供につなげるためアドバイザーとして参加した。千葉氏はフィリピン大学で同国の障害者運動を研究しており、被災地支援にも個人的に取り組んでいることから、アドバイザー兼通訳として参加した。佐藤神父は同国に 14 年間在住し聴覚障害者支援の経験があり、また被災直後よりタクロバンにて支援を行っていることから、手話通訳及び現地情報提供者として参加した。

4. 調査日程

調査期間 2014年2月2日から同年2月8日まで

表1 調査日程

日時		マニラ			日本		
		佐藤神父	千葉	アブナー	馬垣	小倉	堀場
2月	時間	PSFADC	D-knowledge	ライフヘブン協会	ゆめ風基金	AJU	DPI-Japan
2日					大阪>マニラ センチュリー パーク・ホテル	名古屋>マニラ オーキッドガーデン・スイーツ	東京>マニラ
	17:00	打合せ（オーキッドガーデン・スイーツ、マニラ）					
3月	14:00	マニラ>タクロバン					
	18:00	TAPDICO 事務所視察					
		宿泊：レイテ・ノーマル大学、タクロバン					
4火	10:30	タクロバン市政府訪問					
	12:00	打合せ（TAPDICO 事務所）					
	14:00	個別ニーズ調査（TAPDICO 事務所）					
		宿泊：レイテ・ノーマル大学、タクロバン					
5水	8:00	TAPDICO 車両整備					
	11:00	TAPDICO 新事務所予定地視察					
	13:00	個別ニーズ調査（戸別訪問）					
	18:00	全体総括（レイテ・ノーマル大学）					
		宿泊：レイテ・ノーマル大学、タクロバン					
6木	10:00	避難所視察（タクロバン市コンベンション・センター）					
	13:00	タクロバン>マニラ					
					センチュリー パーク・ホテル	オーキッドガーデン・スイーツ	
7金	10:30	福祉機器作製工房視察			支援家族と面会	福祉機器作製工房視察	
					センチュリー パーク・ホテル	オーキッドガーデン・スイーツ	
8土					マニラ>大阪	マニラ>名古屋	マニラ>東京

5. 調査結果

5-1. 調査対象地の概要

タクロバン市はビサヤ諸島に位置するレイテ島北東部に位置する港湾都市で、東ビサヤ地域の経済・物流の中心である。人口は22万人（国家統計局、2010年）で、世帯数約47,000である（タクロバン市政府 HP）。

5-2. 現地の様子

1) 電気、水道

電信柱が各所で傾き、倒れており、電力供給は部分的に復旧していると聞いたが、大部分はジェネレーター使用によるものと考えられる。中心部を外れると日没後は極めて暗い。また避難所や貧困家庭では支給されたと思われるソーラー発電の懐中電灯の使用が散見された。

水道は普及しておらず、各家庭には大小のタンク、バケツが置かれており井戸や避難所の供給に頼っている。

2) 交通インフラ

街の中心部は舗装が行き届いており、道路の被害は僅少であるように見られた。ジムニー（乗合バス）、トライシクル（サイドカー付バイク）など交通量は多く、また被災後に入ったと思われる新車のハイエース、ハイラックスやフォードのSUV車等も多く見られた。バランガイ¹の警官が交通整理に当たっていた。

3) 住宅

海岸に近い家ほど高潮により損壊が激しい。内陸の家は強風により（最大瞬間風速は105m とされる屋根が飛ばされているケースが多く見られた。住民は部分的に壊れた家屋を自力で補修、または放置して住み続けている。建築用の木材が街の各所で積み上げられている。また、各所で国連機関や海外 NGO により仮設住宅が建設されている。コンベンション・センターの敷地内や海岸近くには UNICEF や UNHCR による仮設テントが設置されている。

4) その他の街の様子

街の中心部では小規模な商店が営業を再開しており、人手も多い。同市に多く存在する学校も再開されており、通学する学生も多く見られた。

¹ 同国の最小行政単位



陸に打ち上げられたまま放置された船舶



海岸に近い住宅は全壊し、所々で再建されている



未だ破壊の跡が多く残る



建設中の仮設住宅



避難所のテント



再建中の住宅



交通量は多い



中心部は人手も多い。信号は点灯していない

5) 救援活動

ア) 現地政府による救援活動

訪問した市政府の担当者によると、被災前には約 800 名の障害者が登録されていたが、高潮によりデータを紛失した。現在約 100 名のリストを作成している。災害前には家具作製等の事業に対しローン提供を行っていたが、現在は行っていない。同国の中央政府における障害者政策は DSWD (Department of Social Welfare and Development : 社会福祉・開発省) が担っているが、地方分権が強い同国においては市政府の下に置かれる PSWD (the Philippines Social Welfares Development : 社会福祉開発室) が州単位で障害者フォーカル・パーソンを設置し、障害者のリストを作成している。しかし障害者に対する行政支援は特には確認できなかった。



市庁舎を訪問し担当者との面会



社会福祉課と組合課・生活支援室が連携している

イ) 海外からの救援活動

街の各所で支援機関の看板や旗が見られた。確認できたのは赤十字、Caritas、USAID、セーブ・ザ・チルドレン、UNDP、UNICEF、UNHCR、OXFAM、HANDICAP International、CRS(カトリック救援事業会)等である。UNDP によるキャッシュ・フォー・ワーク²と思われる瓦礫除去なども確認できた。市のソーシャルワーカーによれば、避難所となっているコンベンション・センターでは 12 名の障害者が生活しており、HANDICAP International が福祉機器を提供しているということだったが、TAPDICO が把握していた高齢の女性 (表 2 27 番) は車椅子を有していなかった。

²被災者を復興事業に雇って賃金を支払い、被災地の経済復興と被災者の自立支援につなげる手法



避難所に設置された国連機関のテント



各国・各機関が市政府と共同して避難所を運営している

5-3. 現地活動拠点

TAPDICO は 2008 年に発足した約 20 名の組合員からなる障害者自助組織³である。市政府より提供された事務所で学校用の椅子等を作製することにより収入を得ている。調査団はポリオや四肢切断等の約 10 名の TAPDICO メンバーと面会した。被災後、メンバーの多くは事務所内及び事務所の隣に設置された仮設住宅で生活している。



TAPDICO の事務所。椅子の骨組みが積まれている



事務所の隣に設置された仮設住宅



TAPDICO の旗



調査団を歓迎する TAPDICO メンバー

³ いわゆる障害者の共同組合であり、働ける軽度や聴覚障害者が大部分を占める

今後の TAPDICO による被災障害者救援活動の継続のために必要な支援は以下のとおりとなる。

A)車両整備

FTI (Foundation for These-Abled Persons Inc.) 財団⁴よりトヨタ・ハイエース (リフトなし) を移動用に借用している。当初 TAPDICO よりタイヤ交換の要望があったが、直接確認したところタイヤの摩耗は深刻ではなく、現地で中古タイヤを購入可能であることから、タイヤ交換は行わなかった。一方、メンテナンスが全く行届いておらず、エンジンやトランスミッション、空調等、様々な所に不具合が見られた。したがってエンジンオイルの交換、ラジエーターへの水補給、空調用のガス補給を行った。



TAPDICO メンバーは軽度障害者が多く車椅子使用者がいないため、車両は障害者の移動に不可欠であるという認識が薄いように感じられた。運転手もオートマチック車の構造について理解がないようであり、調査団員より貴重な資産の重要性の認識と維持管理の徹底について助言がなされた。

B)新事務所建設

現事務所は政府より借用しており恒久的な利用保障がないため、TAPDICO は新事務所への移転を計画している。CCA(Canadian Co-operative Association:カナダ協同組合) の資金により郊外の土地 10,000 m² (150 万ペソ (約 340 万円)) 相当) を購入し、現在土地の認証手続き中である。事務所、事業である椅子等の作製所、メンバーの住居を併せて建設す

⁴ アブナー氏も理事を務める

る予定である。事務所は CBM⁵の資金により建設するが、作製所の建設にかかる 80 万ペソ（約 180 万円）、また整地、電気・水道工事にかかる 50 万ペソ（約 110 万円）の資金を得られていない。調査団は事務所移転に対する日本側の支援の実現可能性を検討すべく移転予定地を視察した。

移転予定地は中心部より車で 30 分程の郊外にあり、周辺は草地が広がる。土地は以下写真のとおり未開墾地であり、事務所建設までには相当の時間がかかると考えられる。



5 - 4. 福祉機器供与先

ア) 調査方法







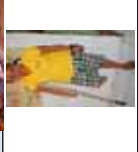

インタビューは事前に用意した質問票に沿いつつ、障害の状況、現在の生活、福祉機器ニーズについて聞き取りを行った。インタビュー対象者は英語を話すものが少なく、タガログ語またはフライ語－英語の通訳は TAPDICO マネージャーの Jose Juby Albay 氏が行った。また、聴覚障害者に対しては佐藤神父が手話にて聞き取りを行った。










2月4日には事前に TAPDICO が把握したリストにより来所を呼びかけた障害者 21 名（TAPDICO メンバーを含む）に対しインタビューを行った。2月5日は5名の障害者を戸別に訪問し、インタビューを行った。2月6日には視察したコンベンション・センターの周辺で2名の障害者を戸別に訪問した。インタビューを行った障害者は合計 28 名である。










TAPDICO の用意したリストにあるが、インタビューを行うことのできなかった者についても、表 2 に加えた。



⁵ キリスト教系の視覚障害者支援 NGO

表2 ニーズ調査結果

氏名		性別	年齢	障害	ニーズ	優先度	特記
1	 Anastacia Medalla	F	45	ポリオ	松葉杖	高	両脚に麻痺、サイズの合わない木製松葉杖を使用している。両親と同居、自宅は全壊。OXFAMの救援に頼っている。松葉杖 96~110cm
2	 Jerry B. Chayiz	M	21	ポリオ	車椅子	高	両脚に麻痺、両手にも多少の麻痺が認められる。兄家族と同居、自宅全壊、OXFAMの仮設住宅にて生活。インタビュアーには同席した兄が回答した。
3	 Norwen Motezan	M	1	判別できず	医療支援	高	姿勢保持できず、視覚にも障害が認められる。父親の営む屋台では収入が少なく、病院に行くことができない。
4	 Rosemarie G. Morillo	F	33	ポリオ	松葉杖	高	左脚麻痺。自宅全壊、隣人宅にて生活。夫はペデイヤブの運転手、子供4人。TAPDICOメンバー。松葉杖 115cm
5	 Jester T. Gamay	M	10	ポリオ?	車椅子	高	両脚麻痺、上体安定せず、発語なし。過去に手術あり。通学なし。自宅は屋根のみ損壊。 横 30cm 奥行 40cm 背 40cm
6	 Leyson Edoardo Holganza	M	58	片脚切断	義肢装具	中	左脚膝より下を切断。自宅は全壊。トライサイクルの運転手。
7	 Mylene Dublin	F	29	先天性四肢欠損	義肢装具	中	右脚膝より下欠損、アルミ製松葉杖使用。TAPDICOメンバー。自宅全壊、家族はマニラへ移住。TAPDICO事務所にて生活。
8	 Johnny Morabe	M	46	ポリオ	車椅子	高	両脚に麻痺。妻共に無職、子供3人。両親と同居、自宅は半壊し、親戚宅にて生活。洋裁の技術があるためミシンが欲しい。

9		Junry Sampol	M	23	両脚切断	義肢装具	中	両脚膝より下欠損（幼少時の火傷が原因）。膝で歩行する。自宅は半壊したが家族が修繕した。TAPDICO メンバー（塗装担当）。
10		Edgar Ditchon	M	51	ポリオ	松葉杖	中	左脚に麻痺。5年前にDSWDより松葉杖を支給されたが新しいものが必要。自宅全壊し、TAPDICO 事務所にて生活。TAPDICO メンバー（溶接担当）。
11		Sandro B. Sandagan	M	42	ポリオ 視野狭窄	サングラス	低	両手足に委縮、歩行は問題なし。TAPDICO メンバー（マーケティング担当）。自宅全壊、TAPDICO 事務所にて生活。
12		Jennifer O. Beltran	F	31	聴覚障害	補聴器	中	手話にて意志疎通。TAPDICO メンバー。自宅全壊、TAPDICO 事務所にて生活。
13		Gerry A. Dagho	M	32	聴覚障害	なし	低	自宅は屋根が損壊したが家族と住み続けている。無職、TAPDICO での就労意欲あり。
14		Arnolfo M. Cabelte	M	37	片腕切断	なし	低	9年前に事故にて左腕切断。TAPDICO メンバー（警備担当）。自宅半壊、TAPDICO 事務所にて生活。
15		Wenife Bacunata	F	32	視覚障害	白杖 トーキングフォン	高	全盲（母が墮胎しようとした際薬の影響）。無職。夫、10歳の娘、母親と避難所で NGO の支援に頼り生活。
16		Joseph Bacunata	M	40	視覚障害	白杖 トーキングフォン	高	全盲（幼少時寄生虫により）。無職。夫、10歳の娘、母親と避難所で NGO の支援に頼り生活。
17		Kenneth Sumaping	M	8	判別できず	車椅子	高	上体安定せず、両脚に麻痺、発語なし。母親が同席。父親は自動車工。自宅は全壊、仮設住宅にて生活。 横 26cm 奥行 40cm 背 35cm、要固定ベルト

18		Roy M. Gososo	M	27	聴覚障害	補聴器	中	難聴、手話にて意志疎通。TAPDICO メンバー。家族 15 人で同居。自宅は屋根が飛び隣人の家へ避難した。
19		Antonio Espinosa	M	59	片脚切断	松葉杖	中	20 年前に左脚の膝より下を切断。無職、既婚。子は職あり。
20		Leondro M. Rosillo	M	45	ポリオ	なし	低	両手に多少の麻痺あり。自宅全壊。兄弟も無職。TAPDICO メンバー（塗装担当、月給 300 ペソ（約 700 円））。
21		Joey Macawile	M	23	聴覚障害	補聴器	中	難聴、左耳に奇形あり。父は台風で死亡、自宅全壊。TAPDICO メンバー（塗装担当）。
22		Mike Cinco	M	11	判別できず	車椅子	高	先天的に四肢麻痺、知的障害、発語なし。自宅は全壊したが再建した。病院での診断はなし。 横 27cm 奥行 35cm 背 30cm
23		John Reg Cinco	M	10	判別できず	車椅子	高	四肢麻痺、知的障害、発語なし。5 歳より発症。自宅は全壊したが再建した。病院での診断はなし。 横 26cm 奥行 30cm 背 30cm
24		Lito Betuin	M	29	高次脳機能障害？	医療支援	高	左腕に麻痺、顔面の緊張、若干の言語障害あり（20 歳の時交通事故により）。左脚首に外傷、化膿し蠅がたかっている。
25		Milagros Dialino	M	63	視覚障害	白杖	中	全盲（40 歳より高熱により）。点字は読めない。家は全壊したが、再建した。息子家族と同居。外出時要介助（自宅周辺はバリアあり）。白杖があっても自力歩行は困難と思われる。
26		Leslie Montega	F	17	髄膜炎	車椅子	高	四肢麻痺、知的障害、発語なし。幼少時発症。父はペディキヤブ運転手、母はサリサリストアを営む。自宅は浸水したが被害は軽微。教育その他行政サービスは皆無。

									横 38cm 奥行 30cm 背 50cm
27		Veronica Omlang Bete	F	67	脳出血	車椅子	高		左半身不随。避難所にて生活。
28		Antonio Joedam Aldaba Jr.	M	40	脊髄損傷	車椅子 (車輪交換)	中		自宅は半壊、使用している車椅子の車輪の損傷が深刻で交換が必要。
29		Lilia Catugda Losanto	F	55	麻痺	車椅子	中		インタビューなし
30		Miguel Mansanares Vergara	M	69	骨粗鬆症	松葉杖	中		インタビューなし
31		Juvita Cramin Abilar	F	84	骨粗鬆症	車椅子	中		インタビューなし
32		Conсорcia Morbos Coral	F	88	高齢	車椅子	中		インタビューなし
33		Euseniokim Ramulte Nomio	M	42	麻痺	車椅子	中		インタビューなし
34		Rogelio Carevela	M	77	麻痺	松葉杖	中		インタビューなし
35		Johnbell S. Veloso	M	13	自閉症?	松葉杖	中		インタビューなし
36		Ruby Rosa Resco	F	46	骨形成不全?	松葉杖	中		インタビューなし
37		Eduardo Lledo	M	57	麻痺	松葉杖	中		インタビューなし
38		Silvia Rose Salazan	M	18	麻痺	車椅子	中		インタビューなし
39		Angelina Morante	F	63	麻痺	車椅子	中		インタビューなし
40		Pedro Navarrete Abrea	M	56	麻痺	車椅子	中		インタビューなし
41		Feliciano Opon Idos	M	57	片脚切断	義肢装具	中		インタビューなし
42		Verzora Leonardo Jr. Restor	M	25	視覚障害	白杖	中		インタビューなし
43		Eufrocina Roquero	F	40	聴覚障害	補聴器	中		インタビューなし

サリサリストア：日用品を販売する小規模商店

イ) 福祉機器ニーズ

障害種別としてはポリオによる身体障害の他、知的障害を伴う四肢麻痺の障害児がインタビュー対象者の大部分を占めた。障害名は各人または同席した家族による申告に基づくが、諸理由により医療専門職による診断を受けていない者が多数おり、必ずしも事実ではないものもあると考えられる。要望のあった福祉機器は以下のとおりである。

車椅子	15台 (内子ども用5台)
松葉杖	8組
白杖	4本
トーキングフォン	2台
補聴器	4個
義肢装具	4台
車椅子車輪交換	1件
医療支援	2名

ウ) 所感

全体として、被災により窮状にあるタクロバンの一般的な世帯状況と比較しても、インタビューを行った障害者の世帯は貧しいレベルにあると感じられた。特に車椅子を要望する障害者は、狭く暗い半壊状態の住宅か仮設住宅内での不自由な暮らしを余儀なくされており、緊急の提供が必要である。全盲の夫妻(表2 15,16番)は、避難する際に近隣住民の支援は得られず、10歳の娘の案内により避難した。またバランガイ・キャプテン⁶より避難所への入居を拒否されたため、コンベンション・センターの避難所での生活を余儀なくされている。通信手段としてトーキング・フォンが至急に必要である。

また、知的障害と四肢麻痺のある少年2名(表2 22,23番)を訪問した際は、一世帯内の同年代の子が酷似する障害をもつだけでなく、周辺世帯にも同様の障害をもつ子どもが3名観察された。住居の周辺にはゴミ・瓦礫集積所があり、飲料水は近くの井戸から汲んでいることから、何らかの環境汚染の影響が懸念される。

⁶ バランガイの長。地方自治が有力な同国ではバランガイ・キャプテンが強い力を持つ。

6. 結論・今後の支援

6-1. 現地活動拠点

A) 車両整備

TAPDICO が現在利用しているハイエースは、5-3A で述べたとおりメンテナンスが行届いていなかったため、調査期間中にエンジンオイル交換等の応急処置を行った。トランスミッションオイルの交換、スペアタイヤ購入のため 10,000 ペソ（約 23,000 円）を TAPDICO に寄付した。また、現在当車両は財団より一時的に借用しているものであり文書での取決めがないため、アブナー氏を通して早急に借用契約を締結することとした。

B) TAPDICO 活動支援

事務所移転に関しては、書類上の土地利用、整地について今後相当の時間を要すること、また同組織の目指す活動が障害者の自助を目的としており、地域生活・インクルージョンを目指す DPI の方針と必ずしも一致しないことが調査団として検討された⁷。このことから、事務所移転に関して日本側は支援しないこととする。

しかしながら、TAPDICO 事務所及び仮設住宅が障害者の生活・就労の場となっていることがインタビューから明らかとなった。したがって TAPDICO の現在の活動支援は被災障害者の救援に効果があると考えられることから、調査団の判断としてゆめ風基金より 7,000 ペソ（約 15,000 円）、DPI 日本会議より 3,000 ペソ（約 7,000 円）を寄付した。

6-2. 福祉機器供与先

台風により障害を負ったケースは本調査では確認されず、収集されたニーズは被災以前からあったものである場合が多いと考えられる。現地で障害者情報の収集に当たった TAPDICO メンバーは各人が貧困地域に居住しており、その近隣から障害者のいる世帯の情報を収集した。このことからインタビューを行った障害者の生活は極めて貧しいことが観察された。障害者を世帯成員に抱えることにより、その家庭の生活水準が低いレベルで維持されていることも想像しうる。このため、福祉機器を供与することはそれら障害者の家庭の介助労働、経済負担を軽減することが期待できるため、今後の生活再建に寄与すると考えられる。したがって上述したニーズに基づく福祉機器を供与するものとする。

⁷ 自立生活センターを運営するアブナー氏も同様の見解であった。

A) 車椅子・松葉杖

インタビューをした者を優先的に、資金規模を考慮しつつ車椅子 15 台、松葉杖 8 組を供与するものとする。車椅子・松葉杖の調達については、当初日本で中古品を集める予定だったが、収集した中古品を保管するスペース及び日本からの輸送費（20 フィートコンテナで 30~40 万円）の確保が困難であることから、調査団はフィリピン国内での調達が可能であるか検討するため、2月6日にメトロ・マニラ市内の福祉工場「Tahanang Walang Hagdanan Inc. (以下タハナン、タガログ語で“階段のない家”）」を視察した。

タカナンは、障害当事者に車椅子等の福祉機器作製、知育玩具・家具等の木工品作製等の就労の場及び生活の場を与える大規模な福祉工場である。価格は概ね以下のとおりである。

マニュアル車椅子	約 26,000 円/台～
クラッチ	約 3,800 円/組～

視察の結果、小倉氏はタハナンで作製する福祉機器の品質は妥当であると判断した。このことから、福祉機器はタハナンで調達するものとする。



タハナンにおける車椅子作製



障害当事者による作成現場を視察

B) その他福祉機器

その他に要望のあった福祉機器については今後検討が必要である。

トーキングフォン	3,000 ペソ (約 6,800 円) ~
----------	------------------------

白杖	価格確認
補聴器	価格確認
義肢装具	個別に調整が必要なため提供は困難か
車椅子車輪交換	個別に調整が必要なため提供は困難か

C) 緊急医療支援

インタビューを行った高次脳機能障害と思われる 29 歳男性（表 2 24 番）は左脚の踝付近に化膿した外傷があり、深刻な状況であったため調査団の判断として 8,200 ペソ（約 19,000 円）を TAPDICO に提供し、同男性への医療支援をフォローする様依頼した。

6-3. 資金調達

上記で述べた今後の支援における必要経費は輸送費（マニラ→タクロバン）を含めて今後算出する。DPI 日本会議における募金だけでは不足であるため、調査団は以下手段による資金調達を提案する。

① T シャツの作成・販売

アブナー氏がデザインし、マニラで作成、日本で販売する

② 連携先の模索

NCDA による被災障害者救援会議にはタハナンの理事及びアブナー氏、全国障害者連盟(A.K.Pinoy)も参加している。本救援活動の主旨を説明し、車椅子購入等の費用分担への協力を試みる。

また、タクロバン市への障害者を含めた救援活動を実施している日本の NPO 難民を助ける会にも連携を提案する。

以上

文責：堀場

謝辞

小倉氏、千葉氏、佐藤神父の多大なる協力・尽力なくしては本調査を成功裏に終えることはできなかった。ここに深く感謝の意を表する。